

## 中国南北の国境地域における人の移動と交流、および国家政策」の成果と課題

著者	塚田 誠之
ページ	20-26
発行年	2010-02-27
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4553">http://hdl.handle.net/10502/4553</a>

## 報告4

# 「中国南北の国境地域における人の移動と交流、および国家政策」の成果と課題

国立民族学博物館 塚田誠之

## 1

中国の国境地域には多様な民族集団が居住し、多くの場合、国境線をはさんで中国および中国と隣接する諸国に同一あるいは同系の民族が居住している。近年、人々の国境を越える移動がますます頻繁に見られるようになっている。

従来、中国の南北国境地域の諸民族の人口移動について、特定の地域を越えた研究はほとんど行われてこなかった<sup>(1)</sup>。当事者の中国や隣接諸国での研究は、それぞれの所属する国家の利害がからみ、主観的になりがちであった。たとえば、国境に跨って居住する民族は中国では「跨境民族」「跨国民族」などと呼ばれるが、研究は中央の側からの政治的な色彩を帯びがちである。中国側の研究では、自国の民族を基準とし、しかも他国の民族に関する情報は、二次資料、すなわち各国で出されている関係論文の中国語訳が使用され、それも概説的な資料が多く、独自の視点からの分析がなされてこなかった。また政府主導の経済開発や技術支援など政治・経済的な側面が強調されがちであった。

本研究は、このような研究の動向に鑑み、中国の南北の国境地域における人の移動と交流の実態を把握し、国家政策の果たす作用を解明せんとする目的で進められた。

具体的な検討課題として次の点が挙げられる。1. 中国では人の移動は歴史上絶え間なく行われ、民族やその文化は移動や移動先での他者との交流を通して形成されてきた。移動することで人々は移動先の地で異なる民族集団を含む他者と接触し交流することになる。移動はどのように行われたのか。また交流には通婚、経済、文化、宗教的活動など多様な側面がある。それらの実態はどうであるのか。さらに、集団間相互の関係はどうであるのか。2. 移動することによって、その民族の文化や宗教、アイデンティティにどのような影響を及ぼしているのか。3. 移動は個人の意思を契機とするのみならず国家の政策を契機としても行われた。国家の政策は移動と交流にどのような作用を果してきたのだろうか。

検討に当たっては、中国南北の相違や山地民と平地民の相違に留意した。また対象とする時期は、国民国家の勃興期に国境が画定され人々の生活空間を分断した時期、19世紀末から民国期を経て現在に至るまでを中心とした。人の移動の歴史的背景を押さえておく必要があるため、19世紀以前の時期にも注意を払った。方法は民族学を中心とするが、歴史学的方法をも視野に入れつつ、また村落・村落群のミクロ・レベルと広い地域や民族・国家といったマクロ・レベルの双方を視野に入れて比較研究を進めた。

## 2

次に本研究の成果について概観する。

個別の班の活動として、国立民族学博物館における国際シンポジウム1回、海外(中国昆明)における国際シンポジウム1回、他班(今泉班)との合同研究会1回を含めて計10回の研究会を行った。これらの成果としてメンバーのうち12名が論文を寄稿した成果報告『中国国境地域の移動と交流——近現代中国の南と北』

(有志舎)を印刷中である(目次は「資料」参照)。また、中国におけるシンポジウムの成果は『中国辺境民族的遷徙流動与文化動態』(塚田・何明編、2009、雲南人民出版社)として刊行し、メンバーのうち6名が執筆した。ほかに、『民博通信』126号(2009)で「国境の人びと」という特集を組み、メンバーのうち4名が執筆した。

ここで個別の研究の成果に立ち入る余裕はないが、全体としての成果として、移動や移動に関わる国家政策の南北国境地域での違い、山地民と平地民の違いを挙げる。

北部においては、楊海英論文(題目は「資料」参照)に見られるように、人の移動は政治の掣肘を受けがちであった。モンゴル族の土地に人為的国境線が引かれて、内モンゴルが中国に組み入れられ「血肉を分かちあった民族」が分断されて移動が制限されてきた。楊論文は、内モンゴルのモンゴル族たちが現代史においてたどってきた運命について、内モンゴルからモンゴルへの越境者のライフ・ヒストリーをまじえながら検討している。ヤルタ協定による内外モンゴルの合併阻止という国際情勢、文化大革命の際の弾圧などの中国の国内事情、さらに現在の内モンゴルの国境防衛の強化などの統合政策によって「心の自由」を尊ぶモンゴル族は分断され続けてきた。とかく政治的な統合を志向しがちな国民国家による少数民族統治の問題点の一環が、「振り子」のように翻弄される弱小民族の立場から浮き彫りにされている。

モンゴル国境では現在も国境の人の往来は制約されている。他方、南部の場合はより開放的である。中越国境は、広西からベトナムへ南下移住したヌン族が、同族の壮(チワン)族と交易や文化活動など日常的に越境して往来してきた(塚田論文)。中緬国境は、タイ系の人々は複数の国民国家に所属しそれぞれの国家システムから影響を受けることになったが、ビルマから中国へ開かれた交通路にそって交易が行われ、仏教の広域ネットワークが形成されるなど国境を越えて経済文化面の交流が行われてきた(長谷川論文)。国民国家によって統合政策がとられ、国境線が引かれて人々の生活圏が分断されたことは南北に共通している。国民国家権力や国際政治に起因する移動は南方にも見られるが<sup>(2)</sup>、しかし、北方では米ソ冷戦、中口関係の国際情勢の影響を長期間受けてより厳しい統合になりがちで、人々が国境を相対化することが可能な環境になりにくかったことが指摘されよう。このように南では北に比べて開放的であったことが実証された。このほか南北の違いとして、流動性の高さ(赤坂論文)が挙げられる。中国では常に人々が流動してきたが、とりわけ遊牧生活に基づく流動性が北方では顕著である。南部の諸民族は漢族と同様、農耕が生業の中心であった。

さらに、中央政府との歴史的なスタンスがある。たとえば清代中期のモンゴルでは、後述のように盟旗制度以外の二重統治体制がとられていた(岡論文)。

加えて、南部の民族のもとでは中央に服従し、漢文化を受容し、祖先の由来や自分たちのアイデンティティが中原・漢族と結び付けて語られる、中央から見ると「内向き」の傾向にあったが、北方民族はともすれば中央・漢族と対峙し、自らの文化的特徴を維持し、中央から見ると「外向き」の傾向にあった。

次に平地民と山地民の比較について、山地民の場合、移動の契機として焼畑耕作が挙げられる<sup>(3)</sup>が、この他、国家権力や国際状況の影響を受けて移動が行われる場合も見られた。この点について片岡論文は、ラフ族の移住について、全体の移住の潮流と個別村落の事例の二方面から国家政策・国際情勢との関わりにおいて検討している。山地民は国家の観念を持たず、常に国家の外に存在していた、とか、焼畑により一次林開拓を繰り返した結果いつの間にか国家を跨いで移住したといったステレオタイプ的な見解を批判し、むしろ国家との関わりゆえに移住を強いられたことを実証した。マクロなレベルでは、ラフ族は、19世紀初に漢人地主と清朝に追われて東南アジア側に移住を開始し、同世紀末には、ビルマの英領化にともなって直接統治をめざす清朝支配に抵抗して移住し、同時期にキリスト教へ改宗した。そして民養村の個別事例の検討からは、第二次大戦期から宣教師に率いられて英米軍・蒋介石を支援し、1949年の中華人民共和国成立を機に国民党軍に随って移住し、反共蜂起に敗れてビルマへ、のちタイへ移住した。このような国際情勢の変化によって、現代冷戦史の最前線を担わされ移住を強いられてきた動きが示されている。

また、山地民は文化的にそれぞれの国家の多数派民族の影響を受けてきた。吉野論文では、中国からタイへ焼畑耕作を行いながら移住したユーミエン(中国ではヤオ族)について、社会組織、儀礼、エスニシティ、物質文化の諸般に及び変容が生じたことを、タイ・中国の場合を比較しながら検討している。注意したいのは、山地民が平地民の影響を受けつつも、その影響を自らのアイデンティティの保持に活かしていく方向を主体的に選択した点である。吉野論文によると、ユーミエンは漢族文化を受容しつつも、その漢族文化を運用して自らのアイデンティティを保持するような戦略をとってきた。山地民は平地民同様に国民国家の統治下に置かれ、ときに冷戦の最前線を担わされたが、そうした環境において彼ら自身の選択した文化的適応様式の平地民との違いが指摘されるのではあるまいか。

ところで、山地民と平地民との歴史的な関係の深さは、武内論文によっても指摘されている。武内論文は、18～19世紀の雲南南部の主要な交易品である茶と綿花に焦点を当てて、その生産と流通を担った山地民・漢族移民の動向を検討している。山地民社会に漢族の移民・商人とともに商業化の波が及び、以前のような山地・平地間の共存関係や山地民の社会が変容していったこと、とかく平地民との違い、独自性が強調されがちな山地民の社会が、実は移民と商業化を通して、相互に深く結びつきながら歴史を紡いでいったことが示されている。このように移動に関して山地民と平地民との比較検討が行われ成果を収めた。

### 3

最後に研究の課題として2点ほど指摘をしたい。

(1)まず、この研究が国境地域を対象にしている以上は、国境の果たす作用や国境地域の住民に対する理解の深化が問題となるであろう。研究成果のなかの多くの論文では、人々は国境を越えて移動してきたし、移動は現在も進行中であることが示されている。人々の日常生活の維持に関するさまざまな実践、経

済活動や文化の伝播、さらには多様なネットワークは国境を越えて展開されてきた。国境を越えた移動や交流を研究することを通して、国境が民族やその文化にいかなる影響を及ぼしたのかを理解することができるが、この点について、吉野論文は、移動によってユーミエンの社会組織、儀礼、エスニシティ、物質文化の諸般に及び変容が生じたことを検討している。国境を越えることで、移住先の多数派民族の影響を受けたり、あるいは共通するルールを持ちながらも異なる運用が行われたことが示されている。長谷川論文は、雲南省西部徳宏地域のタイ族について、雲南・ビルマルートの建設とそれにとまなう交易活動、宗教(仏教)活動、漢族移民の流入、在地の土司の道路建設への関与などの動きを検討している。雲南・ビルマルートは、19世紀末の騰越・バモールルートや1930年代以降の国際輸送路「滇緬公路」であるが、この道を通して牛の隊商などによって様々な物資がもたらされ商業が活性化し、また宗教(仏教)の広域ネットワークの成立するルートともなった。また、国境地域のタイ族に漢族の農民や季節商人が漢族式の家屋や姓・年中行事・教育などをもたらした。かくして文化的アイデンティティやエスニシティの表出において、漢族の影響を受けた雲南側タイ族とビルマのシャン人とで相違が生じたことが示されている。さらに塚田論文は、広西の壮族とベトナムへ移住した同系民族のヌン族との社会文化の異同、両者の間の交易、親戚・友人の往来、同年関係によるネットワーク、通婚、ベトナムからの季節的な出稼ぎなどの動きを検討している。ヌン族のもとで、ベトナムへ移住した後に漢字を保持しつつもキン族の影響を受けて漢字・漢語能力をもつものが減少している現状が指摘されている。このように、国境が民族とその文化に影響を及ぼしたことが具体的事例にそって検討され明らかにされた。国境の作用については、引き続き掘り下げた検討が期待される。国境を越えた民族の文化動態を把握することでそれらの核心となる部分を掘り下げて理解することができるものと考えられる。

なお、不安定な立場に置かれた人々が安定や精神的なよりどころを求めるため独自の文化やアイデンティティを国境地域で形成してきたことにも注意が払われるべきであろう。塚田論文では、壮族とヌン族の間の双方のイメージについて検討し、自民族を基準として相手と同じ言語を話す人として認識していることから、民族名よりも実際使用されている言語が重視されていること、同じ言語を話す「講土」(ガントウ:土話<地元の言語>を話す人々)意識に基づくアイデンティティの形成が示されている(この場合、血縁・友人など個人の関係性の相違によってアイデンティティに濃淡が生じるであろう)。長谷川論文でも、タイ系の人々は国境を越えて汎タイ意識を共有しているし、楊論文でも、モンゴル人の中での国境を越えた同胞意識が顕著であるなど、人々のアイデンティティは国境を越えて形成されている。文化やアイデンティティの問題は、先述のような南北の環境、生業、歴史的経緯、政治とのかかわりを考慮しつつ比較すべき論点の一つである。

さらに塚田論文では、国境に住む人々が政治的な国境線を意識しながらもそれを相対化している現状が示され、現地に居住する人々の立場から国境の持つ意味を問い直すことの必要性が示されている。人々は国境の果たす作用についてどのように認識しているのだろうか。現在の華人の場合は家族の分散を含めて越境移動に抵抗がない(陳論文)というが、諸民族の国境認識はどのようであるのか、国際的なウェブサイトで

異なる国家に分かれた同族の動向を知ることでできる(吉野論文)現在、動向がますます注視される場所である。国境のもつ意味について人々の目線から見直すことが不可欠である。国境をめぐるさらなる文化的な研究が求められている。

(2)成果の多くは19～20世紀のうち現代に重点を置いたものが多かった。19世紀以前、あるいは清末・民国期のデータをどのように充実させていくかが研究に奥行きを与える上で重要であることが再認識された。19世紀以前について、たとえば岡論文は、16世紀初から18世紀中葉にかけての清朝のモンゴル統治の複合的・重層的な構造について、軍事組織である盟旗から、歴代皇帝によって保護され専属の属民を有したチベット仏教寺院広覺寺へ寄進・売却された属民をめぐる争いとその処理に焦点を当てて検討している。この場合、空間的な人の移動というよりは属民の身分的な移転という社会階層の移動である。検討を通じて盟旗制度とともに、それと矛盾するチンギス・ハーンやダヤン・ハーン以来のモンゴル王侯の封建的な主従関係(エジェン・ハリヤアト)が別個に併存するという清朝のモンゴル統治体制における二面性が示されている。こうした統治体制の採用には歴史的な経緯があるが、しかしその後どのような経過を経て、楊論文で扱われる中央政府による強力な統合の時代に至ったのであるのか問題となる<sup>(補注)</sup>。また赤坂報告<sup>(4)</sup>では、西北部のテュルク系諸民族について長期間のタイムスパンを設けた民族集団の形成史の検討が試みられている。それらは国民国家が形成される中華民国期にどのように国家へ統合されて行ったのであろうか。中華民国期から人民共和国へ至る時期を扱った松本論文は、雲南ムスリム知識人が、伝統社会から近代社会への転換という激動期に、自らの宗教、アイデンティティをどう認識し、どう再構築してエスニシティの生存を図ろうとしたのか、ムスリムの国境を越えた移動と情報獲得の及ぼした作用に関わらせながら、ムスリム雑誌の刊行を通じて検討している。19世紀後半にマッカ巡礼から伝統的な「存在一性論」を持ち帰ったが、回民蜂起を経て、19世紀末から20世紀にかけて、キリスト教の伝播、科学技術、帝国主義・国民国家、新式教育など「近代」が押し寄せるなかで、中東・日本を訪れた宗教指導者・知識人たちが新たなイスラーム文化・宗教教義を利用し新たなアイデンティティ形成に着手し、エスニシティとしての「回族」認定運動を進めたことが示されている。ここでは前近代から現代に至るムスリム知識人の動きが当時の史料を用いて明らかにされている。19世紀末から20世紀にかけての歴史をさらに掘り下げて行くことの意義の大きさが指摘されよう。

連携研究全体を立ち上げる際の課題として19世紀末から20世紀にかけての時間とユーラシア・日本の空間の双方に留意した新たな研究が提唱された。中国班でも上記のようにこの問題に取り組んで成果を挙げたが、さらなる研究の深化を得るための課題もまた残されているのである<sup>(5)</sup>。

## 注

1. その数少ない試みとして『民族の移動と文化の動態——中国周縁地域の歴史と現在』[塚田誠之編 2003]では、中国の周縁地域における諸民族の移動と最新の文化の動態を扱った。論点としては、方向や

契機など移動・移住のあり方、移民と受け入れ側との関係、移動を通して見えてくる国家政策、移民と受け入れ側の人々の文化の動態など、人の移動に関わる重要な問題点が検討の俎上に上された。移動と文化の形成との直接的な相関関係あるいは因果関係を明示することには限界があったが、移動・移住現象の研究の蓄積に寄与した。また『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』[塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編 2001]では、中国南部の諸民族の移住について、移住のプロセスにおける国家政策との関わり、移住にともない発生した民族間関係、新たな民族集団の形成やアイデンティティの揺らぎなど、移住現象についてポイントを押さえて検討した。南部が中心ではあるが、中国諸民族の移動・移住研究への貢献は小さくない。それらの中には国境地帯を舞台に検討した論稿も個別的には見られたが、中国南北の国境地帯の移動・移住現象の比較という点では必ずしも十分ではなかった。

2. 長谷川清報告「少数民族社会の農業集団化と人口移動——徳宏タイ族ジンポー族自治州の事例」(2006年10月21日)では、1950年代の雲南徳宏のジンポー族の集団化に際して強制移住が行われたことが指摘された。この点、吉田世津子報告「社会主義と村落社会編成——クルグスタン(キルギス)の農業集団化と住地運動から」(2007年7月14日)では、強制移住の場合、クルグスタンでは人工的な村を建設したが、中国四川ではもとの村落に沿って行われたことが指摘された。南北での政府による強制移住の実態とその相違が検討された。この他、木村論文の雲南ムスリムの台湾への移住は、もとは中国共産党政権成立後の国際関係に起因している。さらに中国から東南アジア大陸部にかけて居住するユーミエン(ヤオ)、モン(ミャオ)などの山地民の一部がラオス内戦によって難民として海外に逃れた。

3. 吉野晃報告「焼畑・戦乱による移動と出稼ぎ・就職のための移動:ユーミエン(ヤオ)の移動の変遷」(2007年12月15日)、谷口裕久報告「山地民族の移住——中国・東南アジア大陸部のミャオ(苗) /モンを例にして」(2009年2月28日)

4. 赤坂恒明報告「中国西北のテュルク系諸民族の形成と族称をめぐって」(2007年12月15日)

5. なお、中国北部のうち東北部の国境地帯の朝鮮族の移動史が検討されたことも研究の成果として挙げておきたい。権寧俊報告「中国朝鮮族の越境移住の歴史と現状」(2009年2月28日)

補注. 20世紀前半の内モンゴル東部における王公制度の廃止、「藩部」体制の消滅については[広川 2009:165-183]が検討している。

## 参考文献

- 塚田誠之編 2003『民族の移動と文化の動態——中国周縁地域の歴史と現在』風響社  
塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編 2001『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』平凡社  
広川佐保 『「藩部」と「内地」——20世紀前半の内モンゴル』 飯島渉・久保亨・村田雄二郎編 2009『シリーズ20世紀 中国史1 中華世界と近代』東京大学出版会

## 資料

塚田誠之編『中国国境地域の移動と交流——近現代中国の南と北』目次

序文 塚田誠之「中国国境地域の移動と交流への視点」

### 第一部 移動のあり方、移動と交流・民族間関係

陳天璽「華人の移動とその目的——世代・地域別比較の試み」

長谷川清「人の流動と民族間関係、文化的アイデンティティの動態——雲南ビルマルート、徳宏傣族の事例」

塚田誠之「中国広西壮(チワン)族とベトナム・ヌン族との交流とイメージ」

武内房司「19世紀前半、雲南南部地域における漢族移住の展開と山地民社会の変容」

赤坂恒明「モンゴル帝国期におけるアス人の移動について」

### 第二部 移動と文化・アイデンティティの変容

木村自「雲南ムスリム移民が取り結ぶ社会関係と宗教実践の変容——台湾への移住者を中心に」

松本ますみ「近代雲南ムスリムのイスラーム改革と変容するアイデンティティ」

吉野晃「ユーミエン(ヤオ)の国境を超えた分布と社会文化的変差」

### 第三部 移動と国家政策

片岡樹「アジア周縁社会における移住と国家権力——華南・東南アジア山地民ラフの事例から」

谷口裕久「中国少数民族」のディスコース——「ミャオ(苗)族」の下位集団をめぐって」

岡洋樹「清代モンゴルにおける旗籍離脱と清朝統治——ウラド後旗と広覚寺の属民争奪の経緯からみた旗民の地位」

楊海英「民族分裂主義者」と「中華民族」——「中国人」とされたモンゴル人の現代史」